「夢で会いましょう」

「一富士二鷹三茄子（なすび）」、初夢を語る有名な三つの言葉です。

昔から人は自分の見る夢に関心を持ち、夢を見つめてきました。夢は自分の心にありながら、自分では知らない心です。先人は、深く夢を見つめた生き方を示しています。

親鸞聖人（1173～1263）は29歳の春暁、夢で聖徳太子（574～622）の言葉に導かれ、比叡山を下りて在家の人が救われる念仏を選んだと伝えられています。

聖人と同じ年に生まれた明恵上人（みょうえ）（1173～1232）は、克明に自分の夢を記録しました。心理学者の河合隼雄（かわい はやお）さん（1928～2007）は、『明恵　夢を生きる』（講談社+α文庫、1995）に、人間にとって夢は、どういう意味があるかを説き明かしています。

河合隼雄さんには、人間の心を深く見つめる精神分析という研究を通して、世界的な名著を読み解く『心の読書術』（新潮文庫、2014）という講演録があります。この本を読んでいると、人間の意識水準という問題が語られています。

私たちは、日常の生活をするとき、何かに関心を寄せたり、覚えたり、確かめたりと、休むことなく外に向かって頭を使っています。それが意識水準の高い状態だといいます。ところが意識水準を下げると、ボーッとして自分を取りまく外側の世界のことが分からなくなるかわりに、自分の心の内側の世界で起こっていることが見やすくなるといいます。

意識水準が下がって、内界のみが見えている状態が、睡眠中の夢だということになりますが、意識の水準を下げて、内界を見ながらも、ボーッとせずに、自分の心に起こっていることをしっかり見るということを、「目を覚まして夢を見る」というのだそうです。

そういうことを人間は、意図的に出来るのです。それが「宗教」の行なのだそうです。その一つが座禅で、禅の修行者は、座って息を数えることに集中して、意識水準を下げながらも、ハッキリと明晰に自分の内側で起きていることを捉えるのだそうです。

2016年9月28日にNHK総合テレビで放送された『ためしてガッテン』で、禅の修行を積んだ人の脳波を紹介する場面がありました。たまたま、その部分だけを見ていたのですが、深い瞑想状態は、寝ている訳ではないけれど、日常の意識水準が下がって、丁度、夢を見ているような脳波が現れるのだそうです。まさに、目を覚ましたまま夢を見ているような脳波の状態です。

河合さんは、自分の外側で起こっていることと同じように、自分の内側で起こっていることには、それぞれ「自我」の私が知らないことが沢山あるという考え方があるといいます。そして、「行」をすることで、頭を使いっぱなしにして疲れ悩む生活を元に戻していくことを人間は大切にしてきたといいます。つまり、「目を覚まして夢を見る」のです。

浄土真宗の深い信心に生きた人を妙好人といい、世界的な仏教学者、鈴木大拙（すずき だいせつ）博士（1870～1966）が英文で世界に伝えて有名になりました。博士は、文字も知らぬ妙好人（みょうこうにん）でもその深い信心は、禅を完成した師匠の境地と等しいとまでいわれました。

妙好人の浅原才市（あさはら さいち）さん（1850～1932）は、念仏行を詩にしています。

才市よい、いま念仏を称えたはだれか
へ、才市であります
そうではあるまえ
へ、親様の直説であります、機法一体であります

私なりに言えば、念仏を生活習慣の行とすると心の中に、普段、知れていなかった如来さま（親様）の慈悲を感じる心が育ち、称える念仏はそのまま、如来さまの呼び声であったと聞こえる世界が開けるということでしょう。手を合わせ、お念仏を称え、心静かにお慈悲に心を向ける者が、確かに出遇って行く深い世界を今年も大切にいたしましょう。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「仏壇の前の私、台所の中の私」

●仏壇の前の私、台所の中の私

仏壇の前や、本堂のお参りでは、念珠を持ち、式章や袈裟をつけ、真宗の門徒らしく振る舞っている私が、台所に戻り、普段の生活に帰ると、親鸞聖人の教えとは、ずいぶんと方向の違う振る舞いや、言葉遣い、そして、思いを巡らすということはないでしょうか。

これは、人に向かって批判するということではなく、私自身は一体どうなっているのだろうと問われることだと思います。

つまり、ひとりの私が、全く異なる二つの原理を疑問も持たず、その時、その場で上手に浄土真宗の教えを使い分けているのです。これを専門用語では真俗二諦論といいます。

●環境問題と真宗門徒

ある門徒推進員が、お念仏の信心を恵まれ、今まで気づかなかった自分の生活の一側面が見えてきたことで、生き方そのものが大きく変わったと教えてくれました。

それは、心が育つことで、自分の電力消費の生活習慣が、遙か遠い、北極海や南氷洋の氷を溶かしているという地球温暖化とつながっているということを実感するようになったのです。それによって少しずつ節電をし、やがて三段階を経て、電力消費量が減りました。それぞれの意識と生活スタイルを元にした、冬場のひと月あたりの電力消費量です。

一、長子誕生でストーブを控え、電気給湯機･エアコン重視の生活スタイル。450Kw。
二、エコライフに関心を持ち、電気給湯機･オーソドックスな石油ストーブの生活スタイル。250Kw。
三、電気のエネルギーロスが最悪だと判明してから、現最終段階は、ガス給湯器･オーソドックスな石油ストーブ重視の生活スタイル。なんと、90Kw。

これは彼女が主婦という立場から、原子力（核）発電に頼る家庭の電力に関心を持ったのが始まりでした。当初、損得や使命感を持ちながらの実践だったそうですが、今では仏さまに相談しながらのエコライフの生活が、色々な気付きをいただく、「お念仏の助縁」となっているといいます。教えと生活が別々ではなく、教えのある生活です。

●信心のしるし

私が30歳の時、ある仏教系学会で、学術発表をしたときの事です。共通テーマが、仏教の「聖と俗」だったので、仏壇の聖なる論理（心）と台所の俗なる論理（生活）を上手に使い分ける浄土真宗の真俗二諦論ということを短くまとめました。

真宗は聖人没後、心の中では真理を大切にする仏さま中心の原理、お念仏の教えを掲げながら、世間の生活では損得ソロバンの論理、政治や権力に媚びを売る世渡りの教学を掲げ、二つの原理を上手に使い分けてきたと論じ、これではいけないと結論づけました。

発表を聞いていて下さっていた、ある高名な真宗学の先生に廊下でご挨拶したところ、

「それで結局、あなたは、どう生きようとしとるのか、問題は、そういうことやな」

と、ひと言、言葉を返されました。私は、研究発表という世間の論理に身を任せ、かっこよく真宗を論じていただけということを決定的に知らされ、目を覚まして貰いました。

その言葉がその後30年、私の念仏生活の方向を導いてくれることになったのです。

心が育つことで、先の御門徒のように原発に関心を持つ生き方も生まれるでしょう。「あなたはどう生きるのか」。それは、あなたの台所の生き方が念仏を軸としていますか？　あなたらしい信心の生き方を示してご覧なさい！　と、常に問われています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「悲しみを超えるのは」

●『奇妙な果実』

人種差別や偏見を扇動する発言を続ける第45代アメリカ大統領の就任式に、参加依頼を受けた英国人歌手のレベッカ･ファーガソンさんは、ジャマイカ系の父と英国白人系の母の間に生まれました。彼女は、次のような条件付きで参加を表明しました。

「もし私が『奇妙な果実（strange　fruit）』を歌うことを許してくれるなら、私はあなたのご招待を快くお受けして、ワシントンでお会いするでしょう。」

ビリー･ホリディが歌ったことで有名になったこの曲の歌詞は、ユダヤ人によって書かれ、リンチなどという直接的な表現こそないものの、「奇妙な果実」とは、なぶり殺され木に釣る下げられた黒人の遺体を意味しているのです。つまり、この曲を歌うとは、アメリカの人種差別を問いかけ悲しみ、それに向き合うということになります。

しかし、この提案を政権移行チームが拒否したため、彼女は出演を断ることになり、実現しませんでした。（日経新聞、2017年1月16日、コラム春秋などを参照）

●エイトマン

エイトマンといっても少年マンガの主人公の探偵ではありません（という話題そのものが50年以上前のことで知っている人の方が少ないです）。

報道によれば、世界でトップから八人の富裕層の総資産は4260億ドルで、それは、その逆の最下位から50％（約36億人）の貧困層の総資産の総計と同額だといいます。そこで、その8人をエイトマンと呼んで、思いを巡らせました。

もし自分がエイトマンの一人ならどうするか。当然、資産運用怠ることなく、減らさず増やすことを心がけるでしょう。もし自分が下位の50％の一人ならどうするか。おそらく、累進課税を増やさせたり、富の偏りのない社会の実現にむけて行動しようとするでしょう（今、世界人口の10％が1日、1.9ドル以下で生活している）。

ところが、昨年、4月のこの法話で、E. フロム氏が、仏教の真髄を「持つこと」ではなく、「成ること」だと紹介したことをふと思い出しました。それなのに、私は、もしエイトマンなら、もし貧困層なら、どうするかと考える時、さらに沢山「持つこと」に、あるいは持っていないから取り返して「持つこと」に関心を向け、どちらに転んでも、「成ること」を忘れている自分がいることに愕然としました。

●持つことから、成ることへ

利害が相反するとき、一体私はどのように「成っていく」ことが大切なのでしょうかと、親鸞聖人にお尋ねすると次のような言葉に出遇います。

当時の権力者である後鳥羽上皇の差配により、法然聖人と共に罪人として扱われ、その後の一生が大きく左右された承元の法難という念仏弾圧がありました。ところが親鸞聖人は、「念仏そしらんひとびと、この世のちの世までのことを、いのりあはせたまふ」「ひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれ」（どちらも第四十三通）と、念仏を非難し敵対する人びとの現世と後世の幸せを、念仏のお仲間と共にお祈りになりますようにと示されています。決して奪い返せとは言われません。

「奇妙な果実」も、奪い返せとは歌っていません。それでは憎しみや悲しみの増幅でしかないことを見届けているからでしょう。「持つこと」を超えて、共に「成ること」を目指して世界を深く生きる目は、悲しみの中から生まれてくるように思います。私は、たとえ悲しい出来事が起きても、それを超えていく身に成っていきたいと願っています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「壁のような“システム”に向き合う希望」

●「春は名のみの」という言葉

　春や四月は新しい「いのち」の息吹きを感じる季節です。ところで新しい「いのち」は、春や四月にだけ生き生きするのではありません。どんな「いのち」も、「いま」を盛りにして息づいています。春や四月という言葉は、頭の中で作り上げた印象を与えます。
　言葉は、物事を限定して決めつけて、生き生きした「いのち」を見失い、忘れ、ないがしろにすることがあります。つまり、「春は名のみ」のこともあります。

●卵と壁

「私たちは、“システム”と呼ばれる、高くて硬い壁に直面している壊れやすい卵です。誰がどう見ても、私たちが勝てる希望はありません。壁はあまりに高く、あまりに強く、そしてあまりに冷たい。しかし、もし私たちが少しでも勝てる希望があるとすれば、それは皆が持つ『いのち』（魂）が、かけがえのない、とり替えることができないものであると信じ、そしてその『いのち』（魂）、を一つにあわせたときの暖かさによってもたらされるものであると信じています（傍線は本多）。
　（略）皆それぞれが、生きた『いのち』（魂）を実体として持っているのです。“システム”はそれをこれっぽっちも持ってはいません。だから、“システム”が私たちを利用することを決して許してはならない、“システム”に意思を委ねてはならないのです。“システム”が私たちを創ったのではない、私たちが“システム”を創り出したのですから。」
　二〇〇九年、エルサレム賞を受賞した時の村上春樹さんスピーチの一部です。“システム”とは、言語体系の組織のことであり、村上さんは、「国家や民族や宗教」という組織だといいます。“システム”には、「いのち」はないのに、その組織に「いのち」を与えると、私たちの自由を縛り、壊してしまうということを語りかけていると私は受けとめました。生き生きとした「いのち」は、決して言葉に留めることは出来ないのです。

●「話し合いをしただけで」

「戦闘を武力衝突」、「墜落を不時着」、「カジノ法を総合型リゾート法」、「武器輸出容認を防衛装備移転三原則」と言葉で印象操作をする組織に「いのち」を与えると、ある集団を「話し合いをしただけで組織的犯罪集団」と見なす「共謀罪」、いや「東京五輪実現テロ等準備罪」という「高くて硬い壁」を張り巡らさせることになるかもしれません。
　ところで親鸞聖人には、当時の権力者の本質は、仏教が説く真理について、根本的にまったく暗い存在だと捉えている手紙があります。そこでは、彼らが、信心の人が神を拝まないことにかこつけて、念仏者たちを弾圧していると示されています。
詮ずるところは、そらごとを申し、ひがごとを、ことにふれて、念仏のひとびとに仰せられつけて、念仏をとどめんとするところの領家･地頭･名主の御はからひどもの候ふらんこと、よくよくやうあるべきことなり。（第二十七通）
　私は、次のように受けとめています。つまり、ありもしない作り事を言い、間違ったことを、ことにふれて、念仏する人々に言いつけて、（それを口実に）念仏を禁止しようとする、それぞれの荘園の所有者や幕府の役人たち、名主たちが企てることは、十分に理由があることといわねばなりません、と教えて下さるのです。そして続けてその理由を、彼らは心の眼や耳を持たない人であるからです、と釈尊の言葉で説明されます。
　そんな状況の念仏者たちに、「念仏を申しあはせたまひ候はば、めでたう候ふ」（第二十五通）と繰り返し、共に「～し合いなさい」と勧めます。私は、村上さんの「いのち」を「一つにあわせたときの暖かさ」を実感する世界と時を超えて重なるように思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「異質なモノを通して開く世界」

●「浄」という言葉

ある小説（村上春樹『騎士団長殺し』2017年、新潮社）を読んでいると、アーノルト・シェーンベルク作曲の弦楽六重奏曲「浄（きよ）められた夜」を思い出しました。この曲は、第一次世界大戦に参戦し、負傷しながら童話や劇作も手がけた、ドイツのリヒャルト・デーメル（1863～1920）の詩をもとに作られた「表題音楽」ともいわれるものです。

月光のもとに、深い課題を抱えた男女の会話が綴られます。

女は言います、「私は子どもを身ごもっているが、あなたの子ではない」こと、そして、「希望を失っている」こと。それに対して男は言います、「子どもを重荷にしてはならない、闇と影の見えるのは貴女に光がある証拠なのだ、子どもを僕の子として産んでほしい」と、二人は夜道を歩んでいく、という内容です。

高校時代、繰り返しこれを聞いた頃には気にも止めていませんでしたが、のちに浄という字の由来に、争いを水に流すという意味があると知りました（氵〈さんずい〉は、水に関する部首です）。

戦争という暴力は人に、都合を超えた「思いもよらぬもの」と向き合わせると思いました。

●悲しさを通して出会う

存覚（ぞんかく）上人（1290～1373）の作といわれる『親鸞聖人正明伝（しょうみょうでん）』に、聖人26歳の逸話があります。

洛中で新春の用事を終え、京の街から延暦寺に帰ろうとすると、延暦寺の麓（ふもと）、結界（けっかい）にあたる赤山（せきざん）明神で、身なりのととのった女性から、仏さまのお慈悲に会わせて頂きたいので、是非、お山に登らせて欲しいと声をかけられます。

親鸞聖人が、ここは女人禁制の寺であり、お連れすることは出来ないと答えられると、比叡の山を開いた最澄さまほどのお坊様が、「一切衆生（いっさいしゅじょう）、悉有仏性（しつうぶっしょう）（あらゆるいのちあるものには、仏になる可能性があるの意）」の教えをご存じないのでしょうか、山に帰る鳥や獣にはメスはいないのでしょうかとその女性は悲しみ訴えられたという話です。

「いのち」の平等を知りながら、気づかぬままに、女性を異質なものと排除する従来の習慣や常識に振り回されているのは、人ごとではないかも知れません。

伝統を学びながらも、まったく平等の「いのち」だから共に救われるという、それまで「身ごもる」ことの無かった新しい世界観、すなわち浄土真宗が、日本の仏教に新風を吹き込み、今や世界にも影響を与えていると感じます。

しかし、それは従来の仏教から見れば、異なる側面、異質な側面を持つものでもあったということです。

●異質なモノ

私たちには、自分の都合を満たそうとする潜在的で先天的な心のはたらきがあります。仏教は、人間の心を深く見つめて、それを「我愛」の心と示しました。

私たち自身に、そして、私たちの作る社会には、都合の悪いもの、異質なモノを排除すれば自分の描く通りに世界は調和がとれて、美しくなるという考えがあります。

しかしそれらは、優生主義、民族浄化、そして、歴史修正主義につながることを現実の歴史を通して学ぶことができます。むしろ、異質なものと共にあるところに、気づかなかったことに気づかされ、多様性を尊重していく社会は生まれます。

今月は、戦前の「教育勅語」とは異なる、多様な世界観を認める「日本国憲法」、「平和憲法」をこのような角度から向き合ってみてはどうだろうと、私は思っています。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「個人の成長は、世界の成熟」

●みんな違ってみんないい?

金子みすゞさん(詩人、1903～1930)は、1990年代にその名が広まり、2011年、東日本大震災の直後、ACジャパンに彼女の『こだまでしょうか』が取り上げられ、若い世代の心にも届きました。

とくに『わたしと小鳥とすずと』の“みんなちがってみんないい”の句はいろいろな場面で紹介されました。なぜこの言葉が受け入れられたのでしょうか?

私たちの社会は、ある一定の価値をもとにして判断や評価がされています。そこでは、効率がよくて合理的なこと、つまり、経済的で生産能力が高いことが重視されます。それは数字で評価されますから、お金に換算されやすい側面があります。

しかし、現実を生きるとは思いもよらない出来事が起こります。その時、役に立つかどうかという価値でなく、それぞれの「いのち」のかけがえがなさを認め合う意味を発見することがあります。“みんなちがってみんないい”の句は、忘れてしまいがちな意味を大切にする心に迫ってきて、お互いに納得し合えたのではないかと私は思いました。

●みんなと同じで安心、違うと不安

ところで、私たちは本当に、みんな違ってみんなよくて、SMAPの歌のように、ひとつだけの花を咲かせることだけでいいと受けとめているでしょうか。よく考えると、そう納得すれば、私も「みんなと同じ」だと自分を安心させているのではないでしょうか。

たとえば、原発再稼動や、憲法改変や、国歌斉唱を考える時、民主主義の社会では、賛成も反対もあり、お互いにみんな違ってもいいことを前提に考えていると思います。

ところが、2020年に東京周辺で開催される国際的運動競技大会については、賛成するのが当然であるかのように、マスメディアは報じているような気がします。

みんな違っていいのなら、たとえ少数でも開催反対の人たちの意見があることを分かりやすく紹介するのが、理にかなった姿勢です。というより、少数者に心を寄せるのが、先の句が大切にしている生き方ではないかと思います。

2013年9月12日の朝日新聞デジタルでは、大会誘致を論じている過程では、「防災の街づくりを」「被災地の復興に意識を」と、幅広い賛否の声があったことを報じています。ところが、東京開催決定後にネット上では、「日本人なら立場に関係なく祝うべきだ」「喜んでないのは非国民」という書き込みが、目立ったそうです。

●すべて同じように輝かせたいと願う

『無量寿経』の第一～十一願には、個人と世界の理想の姿を計画し誓った、阿弥陀如来の願いが説かれます。第一・二願は、地獄(争い)・餓鬼(貪り)・畜生(愚痴)という私たちの煩悩を取り除き、再び、その迷いに戻らせないようにと、個人の理想が誓われます。

第三・四願は、民族や肌の色などの差別や貧富の格差をなくし、平等な人間世界の理想が誓われます。

価値に心を振り回される現代の私たちは、迷いの人びとを救って仏に成らせたい、そして、それによってまことの世界を形成させたいという如来の願いが時代と地域を超えたものだと教えられるようです。その時に、本当の意味で“みんなちがってみんないい”という言葉が心にしみこんできます。私には、その願いが「色々な出来事にお前は、なんと浅い意味で受け止めているのではないか」と呼びかけられているようにも聞こえます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料·茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「教えと生き方～信心の生活」

●土地を築く

「ツキジー、ツキジー、本願寺前です」と、地下鉄日比谷線のアナウンスは、私が子どもの頃から今日まで続いています。今や、ツキジ（築地）は世界的にも有名な地名です。

ところで、この築地の名称は、江戸初期の大火事で浅草御堂と呼ばれた別院が焼失し、そこで、幕府が市街整備のため、本願寺に日比谷沖の海上に百間四方の建て替え地を与えたことに始まります。その替え地の埋め立て工事は、摂津、つまり大阪府から移住した佃島門徒のお念仏のみ教えを聞くお寺を建てたいという願いと協力によって進められました。海上に、土地を築いたので、築地と言うわけです。

●お寺をつなぐ通り

津村別院、通称、北御堂も、本願寺の大阪の別院として大変有名です。北と呼ばれるからには南御堂もあり、大谷派の別院、難波別院ですが、同じ道筋に建っています。その両御堂を南北につなぐ道であるから、「御堂筋」と呼ばれます。今は、一部上場の金融機関や企業が立ち並ぶビジネス街という印象がありますが、これも、お念仏の教えを求める門徒の商人と深い関わりがあります。

大阪は石山御坊（今は大阪城）の寺内町（繊維問屋、薬品問屋など）が基になっています。商売の街に夢をかけた近江、滋賀の商人が、御堂の鐘の聞こえるところに店を出します。そのようにして門徒たちが御堂筋に集まってきたのです。伊藤忠、丸紅などの商社の経営理念はお念仏の教えで、それが大阪の文化や経済を築いてきたのです。

歐陽菲菲（オーヤンフィーフィー）さんが歌った『雨の御堂筋』（1971）とは、本願寺の別院の通りの名前だったのです。

●お陰さまの精神

大阪商人の挨拶は、「儲かりまっか」「まあ、ぼちぼちでんな」といわれていますが、以前は「儲かりまっか」には「おかげさんで」と返したそうです。これは阿弥陀さまのご加護によって、そして、多くの人びとの因縁によって、商売ができ生かされていることをおかげと感じる念仏者の生き方が反映していました。

伊藤忠商事の初代、二代は、熱心な真宗門徒で、商業を菩薩の心にかなうものと受けとめ、仏恩報謝の生き方を事業という形で店員に徹底し社会に貢献しました。

先年、広島で、このような仏縁を通して設立された会社や、生きた人を知りました。

順不同ですが、各国語に翻訳した「仏教聖典」を世界のホテルに無償配布している公益財団法人　仏教伝道協会を設立し、そこに収益の一部を充てているミツトヨ製作所です。

また、広島で始めて創設された銀行、広島商業銀行は、その収益の一部を広島の闡教部（せんきょうぶ）（浄土真宗の組織）の基金造成に充てる目的で設立されました。

そして、安芸門徒で、広島証券（現東洋証券）を作られた斉藤正雄氏は、伽藍にはお金をださないが、人材を育てるということで沢山の学者の学資を援助されました。

現代、お金儲けのため、会計改ざん、排ガス規制や燃費データ改ざん題など、企業不祥事や政治家、官僚の不正が世界の問題となる中、正直で誠実に、商売に使命感を抱き、厳しい倹約を励んだ生き方をお念仏の教えから、問い直せと教えて下さるように思いました。

資料
青木崇「近江商人の流れを汲む伊藤忠商事の企業理念と企業の社会的責任活動」『商大論集』68巻2号
水原史雄『安芸門徒』中国新聞社
熊田重邦『近代真宗の展開と安芸門徒』渓水社

本願寺築地別院（通称、築地本願寺。以下、築地別院と省略する）は、その前身である先述の浜町別院として浅草に寺基をかまえ、「浅草御堂」とも称せられたが、一六五七（明暦三）年正月十八日から十九日にかけての江戸城本丸をはじめ八百八町を焼く、いわゆる「明暦の大火」（振り袖火事）に類焼し炎上した。幕府は、復興に際して市街整備を行い、京都本願寺に対して、「浅草御堂」の地を収公し、八町堀（現八丁堀の旧地名）の海上に百間四方の替え地を与えた。この替え地の埋め立て工事は、摂津（大阪府）から移住した佃島門徒の協力によって進められた。翌一六五八（明暦四）年埋め立て予定地の三分の一ほど工事がすすんだので、仮本堂を建て、同年五月二十七日に本尊の御遷座がなされた（この経緯は、『武蔵抄』『祖門旧事紀』『江戸名所記』に詳しく記載されている）。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「気づかされる学び」

●後ろから声をかけられる

　羽田空港のカウンターで搭乗の手続きを終えて、ゲートに向かおうとすると、後ろから声をかけられました。
「あの、これ、落としましたよ」
　振り返ってみると、後ろに並んでいた中年男性が声をかけてくれたのがわかりました。そして、私の濃い緑色の手帳が床に落ちていました。しかも、床の絨毯（じゅうたん）の色が濃い色だったので、とても気づきにくいものでした。
「ありがとうございます。まったく気づきませんでした。助かりました。」
　と、その男性にお礼をいい、その手帳をしまいました。
　実は、私は忘れ物をすることが多いので、連れ合いから、いつも、振りかえることを身につけること、と言われています。
　自分で気づかないことでも、後ろから見ていると、よく分かるのだということを学びました。

●教えられるということ

　学ぶということを考える時、一つは、私が努力して意識して、知識を増やす方法があります。これは、私自身変えることなく、知らなかったことを積み足していくことです。
　しかし、学びには、私にとって、“教えられた”という実感をともなうことがあります。それは、まったく気づかなかったことに気づかされることです。
　このような学びには、私自身の今までのあり方が、“至らなかった”、“間違っていた”という謙虚さが生まれています。そして、新しい私として成長した、というよりも、育てられたという感謝の気持ちさえが生まれる学び方になります。
　これは、私が学んだのだ、私が知識を獲得したのだという高い姿勢や、思い上がっている時には生まれにくい実感です。自分は至らなかった、知らなかったという低い立場に自ずと立たされる学びです。
「間違っているよ、まだまだ未熟だよ」と言われるのはつらいことです。それで、高い姿勢に立っている時には、自分の姿を教えてくれている人たちの言葉を素直に受け入れることは難しく、かえって自分を批判するだけだとしか受けとめられず、「こんな人たちに」言われてたまるかと反発する心が生まれるのが私たちです。
　しかし、その私が翻（ひるがえ）されて、「ああ、教えられたな」と、ハッと気づかされることがあります。その学びは少しではあっても確実に私自身が根底を変えて育てられた姿です。

●後ろから抱え取る

　親鸞聖人は、阿弥陀如来が私を救う真実のおはたらきを「摂取不捨（せっしゅふしゃ）」と明かされ、その左訓（さくん）（註釈）には「モノノニグルヲオハエトルナリ」と示されています。
　中国仏教の伝統では、物と書いて、人間のことをいいます。つまり、この私は、真実から逃げて背を向けているのですが、如来さま、真実はそれを後ろから追いかけて抱き取るということでしょう。
　省みると私はつねに、真実に背き、自分中心の生き方をしています。省みれば、本堂や仏壇の前に座り、お参りするのは嫌だ、面倒だと逃げているのが私の偽らざる姿です。
　だからこそ、その私の姿に気づかせる、おはたらき、つまり、阿弥陀如来に出遇うのは、前もって、予定していて、前向きに、「やあ、こんにちは」と出会うのではないということでしょう。真実、阿弥陀如来との出遇いは、後ろから追いかけてくださるというのです。
　お念仏は、私の称えるお念仏ですが、それはそのまま、「忘れていますよ」と、呼びかけられていたと味わえます。私にとって、如来さまとの出遇いは、「ああ、そうだった。忘れていた、お恥ずかしい。」そして同時に、「教えて頂いて、ありがたい、もったいない」という気づきをともなうものだと、手帳を拾って頂き実感しました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「人間らしさ」

●チューリング･テスト

『エクス･マキナ』という映画を見ました。近未来、あるいは現代が舞台で、インターネット検索（エンジン）の会社の最高経営責任者（CEO）が、秘密の研究所で、人工知能（AI）を搭載した女性型ロボットの「エヴァ」たちを作成しています。

エヴァは、美しい人間の女性の姿をしていますが、顔面と手首、足首だけが人工皮膚で覆われ、それ以外の身体は、内側の機械が透けて見える状態（スケルトン）です。

カツラと服を着ければ、人間そのものに見え、振る舞い、語りかける「彼女」のチューリング･テストをする役目を、会社の若い男性研究者が引き受けます。

チューリング･テストとは、1950年に、英国のアラン･チューリングが考えたもので、目を閉じて、向き合ったある機械（コンピュータ）の反応が、人間なのか、人工知能であるかを判定するテストのことです。これは、2014年、ロンドンの試技で、「十三歳の少年」という設定で参加したロシアのスーパー「コンピュータ」が、30％以上の確率で、審査員に人間と間違われ初めて「合格者?」となったといわれています。

●人間らしさとは

エヴァは、若く美貌が具わり、知的で機知（ウイット）に富んでいて、主人公の研究員は、「恋に落ちる」という形で、彼女と秘密、つまり人間らしさを共有します。

これで彼女は、ある意味でテストに合格し、人間として扱われるのです。しかし、この判断で、CEOや彼は、彼女たちに、まんまとだまされる、という結末になります。

AIという人工知能は、どこまでも、自分の存在、自分の都合を満たす方向で、情報処理の計算を行うのでしょうが、最終的には、自分たちを作り出した人間の知能や情緒さえ読み超えてしまうのでしょうか。一体、人間とAIの違いは何なのか、と考えました。

しかし専門家でない私には、その分野の定義はまったく分かりません。しかし、仏教の考える人間らしさを見つめるきっかけになりました。

仏教では、人間を「有情」であり、同時に「有覚」でもある　と捉えています。

「有情」とは、感情を持つ存在ということです。衆生とも訳され、すべての動物（畜生）をも意味して、本能にもとづいて行動するものということです。もちろん、仏教が人間を考える時、生物学な姿ではなく、その心を問題にします。つまり有情とは、動物（畜生）と共通し、さらにそれより愚かな我欲の本能を宿している存在だと教えます。

「有覚」とは、元々は考えることのできる存在ということです。しかし、「人間は考える葦である」というように、外側に向かって何かを考え知ることではありません。覚という字で示されるように、自覚、目覚めるということは、自分自身に向かって問いかけ、気づいていなかった自分を内省していくことのできる存在だと教えます。

●慚愧とは、お陰さまの心を生む

仏教では、そのような心の動きを「慚愧（ざんき）」といい、お経には次のように説かれます

> 慚は内に自ら羞恥する（羞じ恥る）ことで、愧は外に向かって発露するものです。慚愧のないものは人とは言えません、畜生と名づけるしかありません、しかし、慚愧の心が生まれるからこそ、親子や師弟などの人間らしい関係が生まれるのです（『大般涅槃経』の私訳）。

では、AIに、慚愧の心が生まれるような、「自分自身の意識を意識できる」プログラムを付けたら、どうなるのでしょうか?　機械と人間との間に、人間らしい関係性が生まれるのでしょうか?と、映画を見た私の想像は、どんどんふくらみます。

しかし、慚愧は、外から強制されるものではないでしょう。お恥ずかしいな、思い上がっていたな、気づいていなかったなという有覚の姿が人間の私に起こるのです。そして今の私は、この世の恵み、お陰さまだったなという心が生まれます。このような人間らしさは、機械がどれほど人間化しても、人間だけが持っている変わらぬ道理のように思えます。

大学時代、哲学科で学んだ、「デウス･エクス･マキナ」というラテン語が頭の隅に残っていた私に、似た題の映画が、仏教を通して人間を見つめ直す機会を与えてくれました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「オフィスアワー」

●オフィスアワー

村上春樹さんの『雑文集』(新潮文庫、2015年)の「オフィスアワー」という文章(89頁)が心に残っていました。その後たまたま、新聞でも目にし、ラジオでも耳にしたので、人びとの関心と自分の関心がシンクロしているようで面白く感じました。

私にとってこの聞き慣れない言葉の意味は、三省堂『大辞林』では次の通りです。

① 業務·勤務·営業などを行っている時間。

② 大学で、教員が学生の質問や相談を受けられるように研究室などにいる時間。

村上さんの本では②の意味で、「アメリカに滞在していて、いくつかの大学で講義をもっていたのですが、そのとき週に1回1時間、『オフィスアワー』というのがありました」、「誰でも先生の研究室のドアをノックして、生徒と先生という枠を離れて、なんでも自由に話をすることができます」と書かれています。

そういえば、今でも地域によっては、こうした時間枠をわざわざ作らずとも、門徒や近所の人びとが住職と当たり前のように普段から話しができる環境がある、と思いました。

正直な所を言えば、これからの寺の住職も、このような時間を作ることが大切になるのだ、という気持ちと、面倒くさいな、できれば避けたいな、という気持ちが起きました。それは、相手と自由に話しをすることは、自分をさらけ出すことになると思うからです。

●ジョハリの窓

1955年、サンフランシスコでジョセフ·ルフトとハリ·インガムの二人の心理学者が発表した説では、私たちの心には、「四つの窓」、つまり、「四つの自分」があるといいます。その説では、それらを知ることが人間関係では必要だと説きます。

まずは、自分と他人がともに知っている自分、その説では「公開された自己」(open self、開放の窓)があるといいます。

次は、自分だけが知っている自分、つまり、「隠された自己」(hidden self、秘密の窓)だといいます。誰にも秘密の自分がある、図星ですね。

さらに、他人だけが知っている自分があり、「自分は気がついていないものの、他人からは見られている自己」(blind self、盲点の窓)だといいます。「無くて七癖」というように、自分で気づかずとも、他人の方がよく知っている自分の姿です。

ところが、よく見つめると、他人も知らないが、自分も知らない自分が、自分にあるといいます。「誰からもまだ知られていない自己」(unknown self、未知の窓)です。

●鏡に向き合う

善導(ぜんどう)大師(613～681)は「経の教は、鏡のごとし」と示され、お経の教え、仏法、お念仏にあうとは鏡に向き合うようなものだと、明かしています。

浄土真宗の長い伝統では、毎日、お仏壇の前で、心静かに合掌し、念仏を称え、如来さまのお心と向き合う生活習慣を大切にします。それをくり返すことで、人の心は深まり、自分が知れてくる、そして同時に如来のお慈悲が肯けるようになります。

それは、今まで知らなかったけれど、こんな怖ろしい、お恥ずかしい自分がいたなあと見えてくることです。その自分とは、自分の棺桶の蓋が閉じられるまで、誰にも知られたくない私です。

しかし、そこには同時に、よくぞ仏法を喜べるようになった自分が生まれたなあと見えてくることでもあるでしょう。その自分とは、如来の教えを素直に受けとめ、それに報いて生きたいという私です。

そのように、今まで知らなかった自分が育てられていたと、「未知の窓」を知ることを大切にしていきたいと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料·茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「相手の身になる」

●バス停と駅前

時々、見知らぬ、初めての土地に出かけます。すると、目に入ってくるものが、自分の慣れ親しんだものとは随分違うことに気づかされます。

半年前のことですから、現在とは微妙に異なるかもしれませんが、私の心の底に次のようなことが記憶として残っています。

飛行機で到着した空港から目的地には、バスで移動しました。私にとって初めての道路、町並み、そして、風景です。途中でいくつかの停留所で停車しました。

車内では、駅前で停まる旨のアナウンスがあるのですが、バスが停車する場所は、その駅前ではなく、近くの商店街でした。駅まで歩けば、2～3分の距離であることは車窓から確認できます。もし、雨が降っていたり、車椅子を利用する方にとっては、バス停から駅までの移動は楽ではなさそうです。

●痛くもない腹を探られる

駅前には、タクシーや自家用車が乗りつけることのできるロータリーが見えます。私は、ふと、「バスならそこまで入って行くのは難しくないだろう。なぜ、駅の利用者にとっては不便な、離れたところで停まるのかな?」と考えました。

私は勝手に思いを巡らせます。「商店街とバス停の場所の関係は、目に見えないところで経済的な問題を通して、ある意図のもとに決定されているのではないか」、「いや、そんなお金だけが問題ではないだろう」などなど、商店街やバス会社の立場の方にとったなら、痛くもない腹を探られるようなことをあれこれ想像してしまいました。

もっとも、終着地の駅前のバス停も、立派な駅前ロータリーからは離れた所にありました。バス停に降り立ち改めて、少し離れた駅前を見ながら、「いやいや、これは商店街やバス会社を批判することだけならば、自分は傍観者でしかない、そして、問題の解決にはなんの役にも立っていない。私たちや私たちの社会が、利用者を念頭にしているかどうかが問題なのだ」と考えこんだりしました。

●カナラズモノノミトナル

親鸞聖人は『和讃』で、真実の真の字に「イツワリヘツラワヌ」と、また、実の字に「カナラズモノノミトナル」という説明の言葉（字の左側にあるので左訓という）を付けています。

モノとは、中国の仏教では物と書いて、人間のことをいいます。真実である阿弥陀如来は、偽(いつわ)りや諂(へつら)いを抱える私たち人間の身となるというのです。つまり、相手の身になって、相手と自分を分けず、相手の立場に立って、相手を育て上げるということでしょう。

このお言葉によって、「相手の身になる」と、言葉で言っているだけならば、それは上辺だけの、形ばかりのところから一歩も出ていないということも教えてくれていると、私は先ほどの自分の心の動きを通して思い当たりました。

そして、そのような自分の姿に気づかされることで、これでいいのか、思い上がっていた、至らなかったという心が恵まれ、一人ひとりの人生に今まで気づかなかった新しい、しかも、お互いを認め合える生き方とは何かと考え、動き出していく葛藤が生まれていくのだと思い当たりました。

●相手の身になれない痛みから

もしかすると、私の暮らしている土地にも、違った文化に慣れた所から、訪ねてこられた方には、「変わっているなあ」「もっと暮らしやすくすることができるなあ」と感じていることが沢山あるのかもしれません。

そのような互いの違いがあるのに、一方の立場にだけしがみついて、自分は正しい間違いないと言い張り、そこから相手を批判したり排除するだけでは、返っていがみ合ったり、対立したりしてしまいます。

少しでも相手の立場を想像したいと思います。それは、相手の身になれない自分を通して、初めて相手の身になることに近づくように思いました。

本当の願いとは、私自身の痛みを通して成り立っていくことは間違いないようです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「『SDGs』と善悪」

●出前授業に考える

「地球の限界、私たちも学ぶ　出前授業で生徒議論」という記事が新聞にありました（2017年10月30日、朝日新聞夕刊）。国際社会が2030年までの達成を目標にしている「SDGs」（持続可能な開発目標*）を出前授業で学ぶ取り組みです。

都立武蔵高校で生物を教える山藤旅聞（さんとうりょぶん）先生（37歳）が、アイスクリーム販売を通じてお客さんに地球環境保護を訴える活動をしている会社や、「森林伐採面積」や「桜の開花日の推移」などの統計を出前先のある区立中学で授業をする様子が紹介されていました。

先生は、生徒たちに答えは示さず、自分で「時代を読む」ことを大切にします。授業の後半では、3種類のチョコレートを生徒全員で食べ比べた後、パーム油を使ったものと使わないものがあることを説明し、次のように現実の状況を語ります。

「パーム油を使えば口当たりが滑らかになるが、大量消費を支えるため、途上国で熱帯雨林が破壊されアブラヤシ農園になっている」

ところで、3種類のなかで1つだけ、「森林破壊をしていない」などの基準を満たす「RSPO認証」のパーム油を使っています。しかし、そのチョコレートの値段は他のものの5倍もします。

「買うかどうかは選択できる。みんなは消費という力で社会や企業を変えられるんだ」

と先生は教えます。生物の授業で、「生態系の保全」について教える「SDGs」が、そのまま環境破壊や貧困格差などの社会の課題、善悪と直接、関係していることを知らされます。

●「悪人」とはなにか

このように別の分野のことが、実は非常にそれぞれ深い関わりがあることを教えられます。そこで、「SDGs」　の話から、善悪とは何か、そして「悪人」という言葉について考えてみたいと思います。

かつて、私たちの文化や歴史の営みの中で、社会の底辺の階層に生き、経済的にも困窮する人びとが、「悪人」と呼ばれていました。

そして、その反対の「善人」とは、社会の上層部に属し、財産も権力も手に入れている立場の人びとを指し、中国ならば、皇帝とその周りにいる人のこととなります。

この「悪人」という言葉は、中国の宋代の僧・戒度（かいど）の『阿弥陀経義疏聞持記（あみだきょうぎしょもんじき）』にも見られ、親鸞聖人はこれを重視され、『教行信証』に引用されています。

さらに聖人は『唯信抄文意』に、戒度の言葉をめぐって、「具縛（ぐばく）の凡愚（ぼんぐ）・屠沽（とこ）の下類（げるい）」と示し、それぞれを「よろづの煩悩にしばられたるわれらなり」「れふし・あき人、さまざまのものはみな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり」と明かします。

先ず第一に、「具縛の凡愚」とは、煩悩を具え、それに縛られる「罪悪深重」「虚仮不実」の人間を「われら」だと示します。つまり、宗教的仏教的な自覚をもとにして、煩悩に縛られる人間を「われら」というので、納得できる表現です。

しかし第二に、「屠沽の下類」とは、社会の中で差別され虐げられる下層階級の人びと（猟師・商人）であり、「いし・かはら・つぶて」のように足蹴にされる存在だといういつつ、それも「われら」というのは、聖人の深い宗教観や人間観・社会観が背景にあります。

つまり、「下類」とは表面的には猟師や商人であるこれど、日々、いのちあるものを食べ、殺生を犯し、損得ソロバン勘定で生きている私たちに他ならないという深い自己内省の味わいがあります。

『歎異抄』で、「善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」といいますが、もちろん、第一に宗教的な自覚としての悪を犯さずにおれないわれら悪人でありつつ、第二に社会の中で、虐げられ、経済的にも善をなすことのできないわれら悪人と考えられます。

●どの立場に身をおいているか

さて、生態系のために100円と500円のどちらのチョコレートを買えばいいか、私たちの多くは、わかっていても　、100円のチョコを買わざるをえない経済的立場に置かれています。それはまさに、善をなすことのできない者、社会的な悪人ということになるでしょう。

いや、こうした知識や情報すら知らない、知らされないような社会的に弱い立場に置かれていたら、どう行動してよいかもわかりません。権力を手にした者には、さまざまな情報が入ってくることでしょう。しかし、社会的に弱い立場は、情報を手にいれることもままならないのは、昔も今も変わりません。

『歎異抄』は、阿弥陀仏の本願の本意を「悪人成仏のため」と明かしています。私は、果たして悪人ということをどの立場で受けとめているのか、チョコレート問題は、とても深い課題になりました。「SDGsは自分たちの生活につながっていると感じてほしい」という山藤先生の言葉が、私の念仏の道への導きになりました。

*SDGs
国連で2015年に全会一致で採択された「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」。2030年までに達成を目指す17分野の目標で示すターゲットには「食品廃棄を半減させる」や「育児や介護、家事という家庭内の無報酬労働を評価し、責任を分担する」など、日常生活でも取り組めるものが多くある。日本は、ジェンダー平等や貧困対策、クリーンエネルギーなどの分野で課題があると指摘されている。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。